
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 121

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2401. 雨降る山を登る夢
- 2402. 標準化分散解析のRコードについて
- 2403. 足かせからの解放
- 2404. 日常を深く生きること
- 2405. 柔らかな夕方から
- 2406. この世界の委託受託関係
- 2407. 子育てへの専念と受託への感謝の念
- 2408. 最終試験に向けて
- 2409. 科学的探究と哲学的探究の調和に向けて
- 2410. 現代社会の治癒と変容に向けて
- 2411. フローニンゲン大学での最後の試験を終えて
- 2412. 【中欧旅行記】中央ヨーロッパに向けた出発の朝
- 2413. 【中欧旅行記】遙か彼方の地点に向かって
- 2414. 【中欧旅行記】スキポール空港のラウンジから
- 2415. 【中欧旅行記】ワルシャワ到着
- 2416. 【中欧旅行記】ワルシャワの日本食レストランから
- 2417. 【中欧旅行記】侘しさと哀しさを引き起こすワルシャワ:ワルシャワ滞在初日の印象
- 2418. 【中欧旅行記】ワルシャワ滞在の二日目の朝に
- 2419. 【中欧旅行記】ワルシャワの物価と言語事情
- 2420. 【中欧旅行記】ワルシャワ滞在の二日目の活動に向けて

ここ数日間と同様に、今朝も五時半に起床した。六時前に早速一日の活動を開始させた。

昨日近くのノーダープラントソン公園へランニングに出かけた時、フローニンゲンの街も随分と暖かくなってきたことに気づいた。もう手袋やマフラーなしで外出ができそうだ。思い出してみると、昨年は五月の半ばまで冬用のジャケットを着用していた。そのことを考えてみると、今年の春の到来は随分と早い。

ただし、少し注意をしなければならないのは、この暖かさからまた冬のような寒さに逆戻りする可能性もあることだ。もしかすると昨年も、一旦春のような暖かさを見せ、そこから五月の半ばまでまた寒くなった可能性もある。天気予報を確認すると、少なくとも今週はずっと暖かい日が続く。これが仮初めのものではなく、真の春の到来であることを望む。

起床直後、この時間帯のせいもあってか、部屋が少し寒かった。昨日から日中はもはや暖房を使う必要がなくなっていたのだが、今朝はまた暖房をつけた。季節の変わり目であるゆえに、体調管理には気をつけようと思う。無理をすることなく日々の取り組みを着実に前に進めていく。適宜休息を取りながらのゆっくりとした前進を絶えず心がける。

今朝方に見た夢について少しばかり思い出していた。夢の中で私は、実際に通っていた小高い山の上にある高校にいた。私は数人の友人と教室で会話をしていた。教室で少しばかり話をした後、私たちは教室を後にし、地下にある駐輪場に向かった。

そこに向かう最中、今日はこのまま帰るか、それとも近くの英語の塾に行くかを皆で話し合った。その場には私を含めて四人の人間がいたが、一人は全く違う方向に家があるため、その話とは関係なかった。そのため、家が同じ方向の三人は、このまま直接家に帰るのか、それとも近所にある英語の塾に行くのかについて話をしていた。私は英語の塾に立ち寄ろうと思っており、もう一人の友人も同じ考えを持っているようだった。

しかし、もう一人の友人はすぐに自宅に帰りたいという思いを持っているようだった。その場ですぐに結論が出ず、結局駐輪場までやってきた。その駐輪場は全校生徒の自転車を停めることができ

るのだが、見ると自転車は数台しかなかった。私以外の全員は早々と自分の自転車を見つけたようだったが、なぜか私は自分の自転車を見つけることがなかなかできなかった。

駐輪場の端っこに自分の自転車を見つけた時、少しばかり安堵の気持ちに包まれた。一人の友人とその場で別れ、私たちはとりあえず山を下って行くことにした。その際に、「新しく部活の顧問になった先生の家が近くにあるらしい」ということを友人の一人が述べ、その先生の家を見に行くことにした。というのも噂によると、その先生の家は大豪邸であり、なかなか見ものであるらしかったからだ。

「いいね、面白そうだからまず先生の家を見に行ってみよう」と私を含めてもう一人の友人が述べた。山の中腹にある先生の豪邸に向かおうとしている最中に、突然雨が降り出した。しかも相当に激しい雨だった。この激しい雨のため、私たちは先生の豪邸を見ることを諦め、山の下まで降りてきた。「これはこのまま帰ったほうがよさそうだね」と一人の友人が述べた。

もう一人の友人と私はその発言に賛同し、結局英語の塾に行くことをやめ、すぐに自宅に帰ることにした。しかし私の心の中では、雨が降っても関係なく英語の塾に行きたいという思いが強かった。そのため、自宅にそのまま帰りたいと最初から思っていた友人を先に帰し、家に帰るか塾に行くかで揺れていた友人を説得し、私たち二人はもう一度山を登り始めた。雨の中で自転車をこぎながら山を登っているところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/4/11(水)06:18

No.961: Inner Flames

My inner flames are palpitating, and their strength is augmenting. I notice that the color becomes deeper and richer. Groningen, 07:56, Sunday, 4/29/2018

2402. 標準化分散解析のRコードについて

早朝の六時を過ぎる頃、辺りは少しずつ明るくなってきた。小鳥の鳴き声が時折聞こえてくる。

今日は昨日よりも若干風があるようであり、目の前の裸の木々が少しばかり揺れているのが見える。今朝方に見た最初の夢について振り返っていると、その頃には次に見た夢の内容の記憶が薄れていた。どこかのセミナー会場で不思議な絵画作品を見ているような夢だったように思う。ふた回りほ

ど年上の知人が講師役を務めており、展示されているいくつかの絵画についてその方に質問をしていたことを覚えている。

それらの作品共通するのは、背景が全て宇宙を表しており、その中に奇妙な形をした人間が描かれているということだった。その奇形な人物は背景の宇宙と一体となっているというよりも、宇宙の上に立っているような感じだった。それらの一連の絵に私は強い関心を示していたため、その場で細かな点も含めていろいろとその方に質問をしていたのを覚えている。しかし、そこからの夢の記憶は薄れてしまっている。

昨夜は就寝前の一時間を作曲理論の学習に充てようと思っていた。そこでは新しい曲を作るのではなく、作曲理論の解説書に記載されている具体例を作曲ソフト上に再現し、曲の構造的パターンを少しずつ身体知にしていくことを行おうとしていた。しかし、いざそれに着手しようと思った時に、その前に現在取り掛かっている研究を少しだけ前に進めようと思った。というのも、再度データを整理し、少しばかり別のデータを追加したこともあったため、いくつかデータ分析をし直す箇所があったからだ。

Rを用いて分析をすることは一つの楽しみでもあるため、Rのアプリケーションを立ち上げ、少しだけデータ分析をしておこうと思った。数分ほどに留めておこうと思ったデータ分析も、結局一時間を越すほどに集中してそれを行なっている自分がいた。

その中で一つ大きな発見をした。この発見はデータ分析の結果に重大な影響を与えるため、より精査が必要だと思った。何を見つけたかという、現在用いている「標準化分散解析(SDA)」という手法をRで行う際の関数は、デフォルト設定だと、時系列データの最初の値を含まずに計算を始めるということがわかったのである。

Rでは各関数について、インターフェース上でそれを調べることができ、SDAの関数の中身について私は改めて確認していた。これを確認した背景には、18個の時系列データのうち、最後の三つの時系列データだけ、なぜかフラクタル次元が算出されず、「NA」の表示になったからである。その関数についての説明を読むと、デフォルト設定では時系列データの最初のデータポイントを含めない

ようになっていた。厳密には、最初の平均値を取る組み合わせのデータポイントが含まれないような設定になっていたのである。

当然ながら、これには何か意味があると思い、このプログラミンコードが参照している原典の論文を読むことにした。その論文は“Evaluation of the Dispersional Analysis Method for Fractal Time Series (1995)”というものであり、生物工学のジャーナルに寄稿されたものである。

中身の全体を確認すると、非常に面白そうな論文であることが分かったため、早速ダウンロードした。この論文を詳しく読んでいくのは後日に回したが、なぜデフォルト設定がそのようになっているのかを考えていた。もちろん、その論文にその解答もしくはヒントがあることは確かだろうが、時間も時間だったので、その場で論文を読むことをせず、まずは自分で少しばかり考えを進めていた。

一昨年に履修した「複雑性と人間発達」というコースにおいてこの手法を習ったとき、最初のデータポイントの平均を除外して計算した記憶はない。むしろそれらを含めて計算を行っていたことを覚えている。プログラミングコードの設定が二つあることを考えると、最初のデータポイントを除外する場合と含めても良い場合があるように思える。それぞれがどのような理由のもとに存在しているのかを明確にしておく必要があるだろう。

というのも、実験的に二つの設定で分析をしてみたところ、算出される値が随分と異なっていたからである。これは私のデータ分析の結果に大きな影響を及ぼすため、二つのケースについて理解を深め、慎重に判断を下さなければならないと思った。ダウンロードした論文を読み、その判断を下すのは、明日の試験が終わってからにするのが良さそうか、それとも中欧旅行から帰ってきてからにするかを考えていた。おそらく前者になるだろう。フローニンゲン:2018/4/11(水)06:54

No.962: Raindrops in Spring

It was thundering and raining heavily. The weather forecast says that it'll be drizzling today. Even so, I can feel that my inner world is calmer than usual. Groningen, 08:38, Monday, 4/30/2018

2403. 足かせからの解放

オランダの人々の朝は早いのかもしれない。そんなことをふと思う。今しがた、書斎の窓から外をぼんやりと眺めていると、早朝の早い時間帯から自転車をこぐ人たちの姿を多く見かけた。八時を迎える前からすでに工事員の人たちが仕事を開始していたようである。日の出が随分と早くなったせいもあるかもしれないが、人々の始動する時間帯が早いように感じる。

今日も優しい朝日が地上に降り注いでいる。結局昨日は一度も雨が降らなかった。天気予報を確認してみると、今日も晴れようだ。今この瞬間に思うのは、いかに日々が伸びやかなものであるかということだ。

日々そのものには何も足かせなどはない。足かせをはめようとするのは私たちだ。私たちはなぜ自らに足かせをはめようとするのだろうか？なぜ自らの小さなエゴにしがみつき、どうして全ての制限から解放される道を歩もうとしないのだろうか？

人間として生きる日々の中において、自由の意味と意義を常に問う自分がいる。小さなエゴへの固執がどれだけ自由を奪っていることだろうか。自らの手によって、そして社会によって構築されたその小さなエゴを完全に焼き尽くさなければならない。自己を小さなエゴから解放させる道はおそらくそれしかないだろう。

構築された付着物としてのエゴが残っている限り、真の自由に至ることはない。発達の道とはつくづくと過酷なのだということに気づく。おそらくここでも、エゴを完全に焼き尽くすことに対するエゴの巧妙な抵抗に遭遇するだろう。「エゴを完全に焼き尽くす必要があるのか？」というような問いは、おそらくエゴの自己防衛機能から生まれる問いに違いない。

発達理論の文献を紐解いてみるといい。すると、エゴを完全に焼き尽くさなければ真の解放などありえないことがわかるだろう。それが困難であるがゆえに、ほぼ全ての人は自らの足かせから解放されないのだ。

辺りが少し影ってきた。太陽が薄い雲の中に入ったらしい。

今日はこれからある協働プロジェクトに関する仕事が一件ほど入っている。それが終わり次第、明日に迫った「デジタルラーニングと学習環境」のコースの最終試験に向けて学習を開始する。試験前日の今日は、もう一度試験範囲になっている全ての文献に目を通そうと思う。ただし、論文の量がいかに多いため、隅から隅まで読み返すのは全くもって賢明ではなく、論文のアブストラクトを丹念に読み返し、本文の中で印をつけている重要箇所のみを拾い読みしていく。

昼食前に、文献をまとめたワードをプリントアウトしに、大学キャンパスに足を運ぶ。午後からはプリントアウトされたまとめを繰り返し読んでいくことにする。おそらくそればかりを読んでいるだけでは集中力が切れてしまうだろうから、試験とは全く関係なく、昨日ダウンロードした現在の研究に関する論文に目を通す。それでも時間が余っていたら、過去の日記記事を編集したり、論文を基にデータ分析のやり直しをしたいと思う。フローニンゲン:2018/4/11(水)08:22

No.963: A Vivacious New Beginning

A new day began. It is May from today. Groningen remains chilly, but I can feel that a vivacious new beginning is coming. Groningen, 09:02, Tuesday, 5/1/2018

2404. 日常を深く生きること

先ほど、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングが終わった。昨年一年間をかけて作り上げた成人発達理論に基づくプログラムがいよいよ世の中に提供されることになった。

協働者の方々の仕事にはいつも感銘を受け、この一年間は濃密な協働関係の中でこのプログラムの開発を進めてきたように思う。それがようやく形になり、いよいよ世の中に提供されると思うと、どこか感慨深い。この感覚はもしかすると、書籍を世に送り出す感覚に近いかもしれない。他者と共に作り上げた創造物をこの世界に提供していくことの意義と喜びのようなものを同時に噛み締めている。これからも意味と価値のあるものを創造し、それをこの世界に共有していくことを続けたい。

ミーティングが終わると、書斎の窓の方に歩み寄り、窓越しに外を眺めていた。目の前の裸の木々が優しい風に揺られている。見ると、木々に小鳥が数羽とまっていることに気づいた。私はぼんやりとその小鳥たちの様子を眺めていた。

日々を咀嚼すること。日々を本当に深く味わうということ。そうした生き方を大切にしたいと改めて思う。

現代人の病の一つは、日常を消費対象と見なしていることなのではないだろうか。現代人は無意識的に日常を消費することに飼い慣らされており、日々の小さな出来事に潜む尊さや深みを蔑ろにしすぎてはいないだろうか。そんな問いが頭の中をよぎる。日常をいくら消費しようとしても、日常の中に充実感と幸福感を見出すことはできない。なぜなら、日々の充実感や幸福感は消費されえぬものの中に潜んでいるからだ。

充実感や幸福感の宿る場所は事物一つ一つの深みである。事物一つ一つの中に意味の深さを見つけることはできないだろうか。なぜ人々は、事物の表層的な意味にしか着目をしないのか。その表皮の奥にはもっと深遠な意味が隠されているのに。

明後日から中欧に行くことが幾分信じられない。フローニンゲンからワルシャワやブダペストに行くことは、私の中では隣町に行くのとあまり変わらないことのように認識されているのかもしれない。これはもちろん、肯定的な意味においてである。つまり、旅に対する冷めや新たな場所に対する冷めとは正反対に、旅と新たな場所への敬意の念が自分の内側に完全に充満し、その充満さが一見すると冷めのように思える態度を生み出しているのだ。

しかしこれは冷めではない。必然の道を歩むことへの自己委譲の念だと言えば分かりやすいかもしれない。なぜワルシャワとブダペストに行くのか？その理由を自分の考えの枠組みから答えることは確かに可能だが、それらの回答を超えた理由がそこにはある。

そうした理由が存在していることを知っているがゆえに、もはや完全に自己をこの世界に明け渡しているのだ。そうした明け渡しの感覚が、今の自分を包んでいる。だからこそ、明後日の早朝に中欧に向けて出発することに対してまだ現実感を持っていないのかもしれない。中欧に向かうことは現実感を帯びる帯びないという問いが挟まれる余地はなく、そこに向かうのは自分にとっての必然なのだ。

日常を深く生きるということ。それは西欧において中欧においても変わらず、この世界のどこに自分がいようとも変わらない生き方なのだと思う。フローニンゲン:2018/4/11(水) 10:59

この人生における一日がまた一つゆっくりと終わりに向かっている。時刻は夕方の六時を迎えた。この時間帯のフローニンゲンはまだまだ明るく、太陽の光が依然として地上に降り注ぎ続けている。ただし、それは朝の光や昼の光とは異なっており、夕方のそれが持つ独特な特徴を醸し出している。朝とは違った優しさが夕方の光にはある。そのようなことを思う。

今日は午前中からこの時間帯にかけて、明日に控えた最終試験に向けた学習を行っていた。もちろん、試験に向けた学習だけを行っていたわけではなく、早朝には日本企業との協働プロジェクトの仕事があり、昼食後にはまた新たに一曲作った。そうした活動を挟みながら、明日に控えた試験に向けての学習をしていた。基本的にもう勉強できることはほぼ終えたように思う。

あとはこれまで学習した内容を確実に定着させることだけが重要であり、新たに知識項目を取り入れようとは思わない。今回のコースを通じて学習した本質的な事柄については自分なりに全て押さえているように思う。これ以上学習を続けてもあまり効果はないであろうことが感覚的に分かるため、明日の午後からの試験の前の午前中に、もう一度全体の要点を確認することに留めたい。

今日はこれから現在取り掛かっている研究を少しばかり前に進める。このステップさえ終了すれば、あとは論文の文章を書くことだけに集中できる。昨日少しばかり行っていたデータ分析の続きを行う。具体的には、昨日発見した、「標準化分散解析」のRプログラミンコードにおける謎を解明しておく必要がある。

プログラミンコードの関数内の条件がほんのわずか変化するだけで結果に大きな差が生まれてしまうことを昨日発見した。端的には、時系列データの最初のデータポイントの組み合わせの平均を分析プロセスに組み入れるか否かの条件によって、対象とする時系列データのフラクタル次元が大きく変わってしまう。その点について、このプログラミンコードの原典にあたる論文を今日大学に行ってプリントアウトしてきた。これからこの謎を解明するべく論文の該当箇所を丹念に読む。

今回の研究において、最初のデータポイントの組み合わせの平均を分析プロセスの中に入れるのが適切なかどうかを判断したのちに、もう一度データ分析を行う。この分析にはほとんど時間がかからず、時間がかかるのは論文を読み、この点に関する自分なりの理解を深めることだろう。

三つの定量化基準で生み出したそれぞれの時系列データのフラクタル次元が明らかになったら、それぞれのフラクタル次元と学習成果の相関係数を算出する。今回の研究で言えば、対象とするMOOCのビデオレクチャーの完遂率、クイズスコア、テストスコアが学習成果に該当する。

相関係数を算出した後は、三つの時系列データのフラクタル次元が学習成果をどれだけ予測することができるのかを調査するために、回帰分析を行っていく。論文アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授からは、ここからさらにフラクタル次元の組み合わせ、つまり独立変数のどういった組み合わせが各学習成果を最もよく予測するのかについて調べてみるのはどうかという提案を受けた。

これは是非調査してみようと思っており、そのためには単回帰分析ではなく、重回帰分析を適用する必要がある。この分析については中欧旅行から戻ってきた際に改めて行いたい。とりあえずもう一つ簡単に行える分析としては、相関係数や回帰係数を調べる前に、三つのフラクタル次元の各々の相関係数を算出することである。これは個人的にも非常に興味があり、それらのフラクタル次元がどの程度相関があるのかは興味深い。今日はとりあえず、重回帰分析の手前まで分析を進め、中欧旅行から戻ってきたらまずはそれまでの分析結果を文章にしていきたい。フローニンゲン:2018/4/11(水)18:24

2406. この世界の委託受託関係

「学びを委託し、学びを受託している」そんな気づきが生まれたのは夕食を摂り終えた直後だった。

緩やかな風がフローニンゲンを駆け抜けており、夕日が西の空に沈もうとしている。この街に風が吹き抜けていけばいだけ、太陽が西の空に近づいているような気がする。風は太陽の進行の後押しをしているのかもしれない、太陽は風に生命を与えているのかもしれない。そんな相互互惠関係がこの世界には存在しているのではないだろうか。

夕食を摂り終えた後、私は学びを他者に委託し、他者から学びを受託しているのだとふと思った。日々私が学びを深めている領域というのは一見すると広く見えるかもしれないが、それはこの世に存在する無限の探究領域からすると豆粒ほどでしかない。

私は日々、他者が自分の代わりに学びを深めていってくれたことからもたらされる恩恵を自分がどれだけ授かっているかを知る。もしばらくしたら、私はかかりつけの歯科医のところに行く必要があるだろう。歯学の領域はまさに私が他者に委託した探究領域だ。今日はこれからプログラミング言語のRを用いてデータ分析をする。そもそもRを構築したのはコンピューターサイエンスの専門家であろう。コンピューターサイエンスという領域もまさに私が他者に委託した探究領域だ。このように、私が他者に委託した探究領域を挙げればきりが無い。それこそ本当に無数の領域が存在する。

ちょうど昨日にランニングに出かけた帰りに気づいたことと、これは密接な関係がある。私たちは常に他者の仕事の恩恵を受けながら自らの仕事と生活を成り立たせているのである。私の代わりに学びを深めてくれる人たちがこの世界に無数に存在している。彼らの学びに支えられる形で私の日々の仕事と生活がある。そうしたことを考えた時、まさに同じことが自らの学びについて当てはまると思った。

米国時代の私はもはやここにいない。あの時の私は、ただ自分の探究衝動に純粋に従う形で学びを深めていくことにしか関心がなかった。つまり、自らの学びがこの世界といかにつながっているかの理解がなかったのである。当時を振り返ると、あの時の学びは随分と自閉的なものだったように思う。現在のように日記を書くこともなく、本当に毎日ひたすらに書籍と論文だけを読むような生活を数年間送っていた。そうした時代を経て、あの時とは全く異なる自分が今ここにいることに気づく。学びというのは閉じられた系ではなく、開かれた系だったのだ。

数ヶ月後に私は、欧米で取得する三つ目の修士号を得ることになる。なぜか自分の内側では、四つ目の修士号を取得し、そこから連続して三つの博士号を取得するような促しの声が聞こえる。最近その声は強まるばかりである。「ああ、自分は学びを受託されているのかもしれない」そんなことを思ったのは、自分をどこか継続的な学びに向かわせている力の存在に気づいたからなのかもしれない。

おそらく私はこの世界の誰かから、そして世界そのものから、継続的な学びを受託されているに違いない。でなければ、四つ目の修士号と三つの博士号をここから連続して取得することが当たり前すぎると思っている自分の声を説明することができない。それはあまりに当然な成り行きであって、

全くもって常軌を逸していない。ここからの学びを冷静に眺めてみれば、やはりそれは呼吸をゆっくり行うことと同じようにしか思えない。

継続的な学びをこの世界から受託されているのであるから、それは自然なことなのだ。私はこれから他者に学びを委託し、他者から学びを受託し続けたいと思う。委託と受託の関係によって、この人間世界も、そして自然界も成り立っているのではないだろうか。

西の空に沈もうとしている夕日とフローニンゲンの街を吹き抜ける風がそうした相互関係を見事に説明してくれている。フローニンゲン:2018/4/11(水)19:51

2407. 子育てへの専念と受託への感謝の念

この世界に存在する委託と受託の関係について考えた後、現在取り掛かっている研究のデータ分析を行おうとした。すると、書斎の窓の前を一羽の鳥が横切り、それを目撃した瞬間に、「四年間ほど子育てに専念したい」という思いが突如湧いてきた。その予兆のようなものは、先ほど皿洗いをしていた時にあった。私はまだ子供がいないのだが、「子供が生まれたら、誕生から四年間は子育てに専念したい」という思いが出てきたのである。

これは可能であるならば、よほどの案件でない限り四年間仕事を一切入れず、研究は継続しながらも、基本的には子育てに専念したい。ルドルフ・シュタイナーの発達思想において、生誕からの数年間はまさに魂の発育期に該当する最も大切な時期だ。この時期を自分の子供とできるだけ長く、そして深く同じ時間を過ごしたいという思いがある。確かに今の状況を考えると、四年間ほど協働プロジェクトの仕事をしらないというのは無理な話かもしれない。

だが、できるだけその期間は自らの研究活動を静かに続け、その他の仕事はそれほど入れない形で子供と多くの時間を過ごしたいと思う。仮にいくつかの協働プロジェクトに従事していたとしても、常に心のゆとりを持って日々を過ごせるような働き方をしたい。そうすれば、仮に時間としては長くなくても、自分の子供と過ごす時間は深いものになるだろう。子供がいないにもかかわらず、そんなことを夕食後にぼんやりと考えていた。

いよいよ明後日からは中欧旅行が始まる。新たな旅は新たな出会いを意味しており、同時にそれは自己の新たな出発を意味している。今回訪れるポーランドもハンガリーも東欧ではなく、中央ヨーロッパの国々に分類されることを先日知った。以前オーストリアに行った時、そこは中央ヨーロッパだという認識があり、ウィーンの街の標識を見ると、ブダペストまで近いことが分かり、ハンガリーも中央ヨーロッパの国なのだ、ということを考えていたことをふと思い出したのが先日だった。

そうであれば、ポーランドも中央ヨーロッパの国なのではないかと思って調べてみると、両国はまさに中欧の国々だったことを知ったのは数日前のことである。歴史上、以前は両国ともに東欧諸国に該当していたそうなのだが、今は中欧諸国に該当しているようだ。

昨年春にオーストリアに旅をしたため、今回は中欧諸国に行くのは初めてではない。しかし、ポーランドもハンガリーも初めて足を踏み入れる国々であることに代わりはなく、きっと新たな出会いがそこであるだろう。もちろんそこには、人々や文化との新たな出会いも含まれているが、自己の新たな側面との出会いもあるに違いない。中欧旅行の最中も、これまでの日々と変わることなく、日記を書き続けたいと思う。

移動中の列車や旅先のホテルなど、様々な場所でその日の体験を書き留めておく。「ああ、自らの体験を日記として綴ることもきっとこの世界から受託されたことの一つなのだろう」という考えがずっと顔を覗かせる。本当にそうなのかもしれない。自分の日々を書き綴ることは、この世界から受託された大切な役割なのかもしれない。

この世界で自分にできることは本当に数少ない。だが、この世界から受託されたことは最後の最後まで全うし続けたいと思う。日記を書くことはこの世界から受託されたことなのだ。であれば、残りの人生において毎日日記を書き留めておきたいと思う。

こうした役割を与えてくれたこの世界に対して、私は感謝の念を捧げたい。この役割と感謝の念さえあれば、明日もまた今日と同じように充実した一日を生きることができると思うのだ。フローニンゲン：
2018/4/11(水)20:17

今朝もここ数日と同様に五時半に起床し、六時前から一日の活動を始めた。朝起きてみると、この時間帯はやはりまだ寒く、暖房が必要だと思った。就寝前に暖房をつけておき、深夜未明の気温の低下を予防しておく必要がまだあるのだなと思った。明日は今日と同じ時間帯に起き、早朝の早い時間帯にアムステルダム空港に向かう。そう、明日はいよいよ中欧諸国への旅が始まる日だ。アムステルダムからワルシャワへの航空便は、十時半に搭乗予定のものであり、それほど早いわけではない。

しかし、フローニンゲンからアムステルダム空港までは電車で二時間半ほどかかるため、六時には自宅を出発し、六時半の電車に乗ることができればと思う。そう考えると明日はもう少し早く起きた方がいいかもしれない。空港に早めに到着し、空港のラウンジでまた日記を書き留めたり、過去の日記を読み返すことをしたい。今回の旅には音楽哲学に関する一冊の書物とバルトークの楽譜しか持っていないようにし、旅の隙間時間は基本的に日記を書き留めたり、これまでの日記の編集に時間を充てたいと思う。

今日も小鳥たちが高らかに美しい歌声を世界に響かせている。辺りも少しずつ明るくなってきた。鳥たちの一日の活動の開始は本当に早いとつくづく思う。彼らが夜中にどこでどのように休息を取っているのかにちょっとばかり想像を働かせてみる。小鳥たちの歌声を聞きながら、私も今日の仕事に取り掛かりたいと思う。

今日は午後の二時から、フローニンゲン大学で受ける最後の試験がある。それは研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授が担当するコースである。いつものように、今回の試験に向けて事前に計画を立て、その通りに学習を進めてきた。学習した内容と何度繰り返し触れてきただろうか。繰り返しの接触は学習において非常に重要であり、そのおかげで学習項目が随分と血肉化されたように思う。

今回のコースはオンラインラーニングを取り扱うものであり、これまで実際に自分が提供していたオンラインラーニングの講座を思い出しながら、経験を基にした形でこのコースを受講することができたことも大きいだろう。

今日は午前中に、試験範囲となっている文献を自分の言葉でまとめた資料に再度目を通す。とりわけ、その中でも記憶の定着が曖昧なものにまずは絞って目を通していく。その後、最後に全体を通して目を通す。試験が午後の二時からということもあり、試験会場で再びこの資料に目を通す余裕がありそうだ。試験時間は三時間と比較的長丁場であるため、試験が終わってから自宅に戻る頃には六時近くになっているだろう。そこからは少しばかり研究を前に進めたいと思う。

ただし、明日は五時あたりに起床してアムステルダム空港に向かう必要性を考えると、研究に時間を充てるのは二時間程度にして、今日はいつもより早めに就寝しようと思う。明日からの中欧旅行に向けて、今日もまた充実した一日になるだろう。フローニンゲン:2018/4/12(木)06:27

2409. 科学的探究と哲学的探究の調和に向けて

六時半を迎えたフローニンゲンは、すっかりと明るい世界となった。確かに少しうっすらとした雲が上空を覆っているが、それでもこれから朝日がより鮮明になるだろうという予感がする。

今日は幸いにも雨がほとんど降らないようだ。昨日の天気予報では、ちょうど最終試験に向かう最中に雨が降る予報となっていたが、仮に雨が降るとしてももう少し遅い時間に雨がわずかばかり降るようである。雨が降るとすれば試験中の時間帯であり、試験が終わる頃にはまた晴れとなり、今日の深夜にまた少し雨がぱらつくようである。明日からはワルシャワとブダペストへの旅行が始まる。

両都市のこれから一週間ほどの天気予報を確認すると、快晴続きであることが分かり、とても嬉しく思う。晴れであっても、雨であっても、それは自然の恵みであることに違いはない。そうは言っても、旅の期間中に心地良い快晴が続くことは、これまでの長い冬の時期を考えると、やはり私を高揚させてくれるものがある。今回の旅行の最中に天気に恵まれそうであることに対して、感謝の念を持つ必要があるだろう。

今日の午後に、フローニンゲン大学で受ける最後の試験があることはすでに日記に書き留めた。振り返ってみると、フローニンゲン大学で過ごした二年間においては、随分と厳格な科学トレーニングを受けたように思う。科学者として研究活動を行うための強固な基盤を構築できたことはとても有り難いことであった。当然ながら、これからも人間発達という現象を中心にした科学的な研究を続けていきたいと思う。

しかし一方で、やはり私は依然として哲学に強い関心があるようだ。特に最近はその関心が強くなってきている。米国のジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃は、人間発達を科学的な観点で探究するというよりもむしろ、哲学的な観点で探究を進めていたと言えるだろう。確かに、発達測定を活用した研究などを行ってはいたが、フローニンゲン大学で受けたトレーニングと比較してみると、当時のそれを科学的な研究と呼ぶことはあまり妥当ではない。

この二年間、密に練られた科学トレーニングを積むことができたことは幸いである。一方で、ここからは再び哲学的な観点で人間の発達を捉えていくことにも力を注いでいきたいと思う。仮に秋から米国の大学院に移ることができたら、そこでは自分の探究のみを行える環境がある。何か決められたコースを受けることが要求されているわけではなく、受講したいコースがあれば好きなように聴講できる。

自分の関心に基づくコースを聴講しながら、自らの探究をまた前に進めていきたいと思う。今のところ、確かに聴講する予定のコースは、応用数学科の数理モデリングに関するコースや統計学科の非線形時系列データ分析に関するコースであったりと、科学的な内容のものがあることは確かだ。しかし、それ以外にも、芸術と人間発達に関する哲学のコースなど、思想的な内容を持つものも聴講しようと思う。秋からの探究生活においても、人間発達をテーマにした科学的な研究を行う予定になっているが、このテーマを哲学的な観点で探究していくことを忘れないようにしたい。

そのために、音楽や芸術の観点から人間発達を捉えていくことが重要になり、教育哲学の観点から人間発達を捉えていくことが重要になる。これまでの自分にはない領域から人間発達に関する自らの思想をより広く深く育んでいき、これまで馴染みのある領域に関してはより一層その哲学的な観点到に踏み込んでいきたいと思う。発達科学、システム科学、ネットワーク科学の背景にある哲学的なテーマは無限にあり、その思想世界はとても奥深いのだから。フローニンゲン:2018/4/12(木)

06:49

2410. 現代社会の治癒と変容に向けて

五時半に起床し、六時から一日の活動を始めたからであろうか、午前九時を迎える頃には今日の試験に向けた学習の最後の詰めをほとんど終わらせることができた。これからもう少し学習を進め、

一旦そこで午前の学習を終える。昼食を摂り、試験が始まる直前にまた最後の確認をすればもう十分だろう。午前中の最終確認を全て終えてもまだ時間が余りそうであるから、過去の日記を編集することや作曲実践に時間を充てたいと思う。

書斎の窓から外を眺めると、先日から開始された道の工事がだいぶ進んでいることに気づいた。早朝の七時半ぐらいから仕事を始める作業員たちの姿を私はほぼ毎日見てきた。彼らが人の目につかないところで絶えず仕事を少しずつ進めていた成果がまさにここにある。継続して仕事に取り組むことの意義、少しずつ自らの仕事を絶えず前に進めていくことの意義を実感する。それは少しずつ、そして着実に形となって現れてくるものなのだ。

数日前にノーダープラントソン公園にランニングに出かけた時、天気がとても良く、公園の芝生にマットを広げて本を読んだり、談笑したりする学生たちの姿をちらほら見かけた。なぜかその光景が今もとても印象に残っている。青空の下で書物を読んだり、仲間と語り合うことの素晴らしさをあの光景は自分に伝えているのかもしれない。開放的な空間の中で書物と向き合うことや他者と対話することの中に何かかけがえのないものがあるように思えてくる。

これからフローニンゲンの街がより春らしくなってくれば、そうした人たちの姿をもっと見かけるようになるだろう。私は公園で書物を読んだり、他者と語り合ったりすることはないかもしれないが、他者のそうした姿を見ているだけでもどこか幸福感が生まれてくる。そうした幸福感を感じられるだけで十分だ。

先ほど改めて、治癒と変容の関係について考えていた。それらはどうも表裏一体の関係にあるらしい。治癒による変容と、変容による治癒の双方の現象が存在していることに気づく。この世界に存在する様々な認識上の病理を治癒によって変容させていくことと、変容によって治癒していくことの双方がこの現代社会に求められているように思える。

治癒と変容は全ての生きとし生けるものに不可欠なものであるのと同時に、この社会にも不可欠なものである。以前の日記で書き留めていたように、そうした治癒と変容の双方に携わることが自分に求められていることのように思えてくる。その関与を行う力として、科学、哲学、芸術が必要になる。だから私はそれら三つの領域を深く探究しようとしているのだ、という気づきを得る。

科学、哲学、芸術の力を借りながら、この現代社会の治癒と変容に向けた取り組みを少しずつ継続して行っていく。誰も見ていないところで働くあの作業員たちのように、この社会に少しでも関与していくような歩みを今日も進めたい。フローニンゲン:2018/4/12(木)09:25

2411. フローニンゲン大学での最後の試験を終えて

先ほど無事にフローニンゲン大学での最後の試験を終えた。振り返ってみれば、二年前にフローニンゲン大学の修士課程に入学した時、米国の大学院時代とは異なり、筆記試験が要求されていることに最初は戸惑ったのを覚えている。当時の私の中では、米国の大学院時代のように、コースで取り上げられた論文や専門書を用いながら、自分の選んだトピックに対して期末レポートを書いていく方が学習効果が高い方法のように思っていた。しかし、この二年間を振り返ってみて、コースで習得した知識の習熟度を試す筆記試験にも固有の価値があり、幅広い知識を獲得するという点においては筆記試験の形式の方が良いのかもしれないと思うほどになった。

ただし、やはり私の中では依然として、米国時代のように論文だけで成績が評価される方が望ましいと思っている。その理由は単純明快であり、私は文章を書くことが純粋に好きなのだ。最終試験を終えて、そのようなことをふと思った。フローニンゲン大学での最後の試験は、論文アドバイザーを務めるミヒヤエル・ツショル教授の「デジタルラーニングと学習環境」というコースに関するものだった。

自分のアドバイザーの科目が最後の試験になるというのは何かの縁かもしれない。いくつかあまり想定していない設問もあったが、三時間の試験を無事に終えることができた。もちろんまだ修士論文の提出が残っているが、フローニンゲン大学での二つ目の修士号を問題なく取得できると思う。ほんの十年前は、修士号など全く取るつもりなく社会人となったが、今は気づけば欧米で三つの修士号を取得することになった。

人生というのは本当に何が起こるかわからないものである。肝心の修士論文は、六月の中旬に提出することをツショル教授と約束した。その提出をもってして、二年間のフローニンゲン大学での留学生活を終える。

ただっ広い試験会場に最後まで残っていたのは、私を含めてわずか三人の学生だけだった。この試験会場では他の学科の試験も並行して行われており、右端にはコンピューター試験を受けている学生たちがいた。

現在私が所属している学科は教育科学学科であり、この学科の試験は全て三時間と長丁場だ。昨年に在籍していた心理学学科の試験は二時間で統一されており、それと比較すると一時間も長いことになる。今日の試験では随分と時間が余るだろうと思っていたが、結局三時間トイレ休憩に行くこともなく、ひたすら回答を続け、それでも試験が終わるのは終了時刻の五分前だった。

試験の回答とコースに関するアンケート用紙を最前列に座っていたツショル教授に渡した時、「明日からの中欧旅行を楽しんでください」と笑顔で声をかけてもらった。私はお礼を述べ、試験会場を後にした。

試験終了後の帰り道、よくよく考えてみると、ツショル教授との研究ミーティングも残りあとわずかになったことを知る。これまで本当に親身になってサポートをしていただき、ツショル教授からの支援のおかげで、五年ぶりに査読付き論文を出版することができた。その論文の内容を発表する場がまさに、六月末にロンドンで行われる国際学習科学学会である。ツショル教授からこの学会を教えてもらうまで、私はこの学会の存在を知らず、この学会に論文を提出することなどなかったはずである。

そうしたことを考えると、この学会について教えてくださったことだけではなく、実際に査読付き論文を執筆するところまで親身に支援をしてくださったツショル教授には本当に感謝をしなければならない。ささやかながら、明日からの中欧旅行の際にツショル教授に何かお土産を購入しようと思う。いよいよ明日に中欧へ旅立つ。今から簡単に荷造りをし、今日は早めに就寝しようと思う。フーニンゲン:2018/4/12(木) 19:12

No.964: Trial and Error in Music Composition

Because it is very easy to do trial and error to compose music in MuseScore, I'll make full use of this advantage. I can attempt as much trial and error as possible to enhance my composition skills. Groningen, 17:13, Tuesday, 5/1/2018

今朝は早朝の四時過ぎに目を覚ました。いつもより随分と早い目覚めとなった。おそらくそれは、今日これから中央ヨーロッパへ旅に出かけるからだろう。予定では五時に起床しようと思っていたのだが、旅への期待感からか幾分早く起床することになった。早く起きることに越したことはないので、私は四時過ぎから旅に向けての支度を始めた。今支度が全て終わり、これからフローニンゲンの中央駅に向かおうと思う。

今のこの瞬間にも小鳥たちの鳴き声が聞こえている。いつも以上に透き通った声であるかのように聞こえてくる。時刻は五時半であるから、まだ多くの人たちは活動を開始していない。辺りはとてもひっそりとしていて、まだ暗闇に包まれている。そうしたことから、なお一層、小鳥たちの鳴き声がこの世界にこだましているのだ。

今日これから向かうのはポーランドの首都ワルシャワである。先日、インターン先のアドバイザーであるエスター・ボウマ博士は、ワルシャワよりもクラクフの街を勧めていた。しかし、私にはワルシャワに足を運ぶ必然的な理由がある。そんなことを思う。

ワルシャワでは主に、ショパン博物館、ワルシャワ国立美術館、ポーランド・ユダヤ人歴史博物館の三箇所を訪れる。おそらくこれらの場所を訪れる何かしらの理由が私の中にあり、ワルシャワという街を訪れる必然的な理由が自分の内側にあるのだと思う。それが何かは今では分からない。実際にワルシャワを訪れ、自らの足で街を歩き、ワルシャワの空気を吸うことによって初めて、徐々にそれらの理由が明らかになっていくだろう。それはブダペストに対しても同じである。

昨夜、荷造りをしている時、バルトークの楽譜を持っていくかどうかを一瞬考えた。今回の旅では荷物を最小限にしているが、その中でバルトークの楽譜を持っていくか少しばかり考えた。旅先では日記の執筆に時間を充てたり、観光による疲れから作曲ができる余裕はないかもしれないと思った。だが、今朝方改めて考えてみたところ、バルトークの楽譜を持っていくことにした。

持参するのは、『ミクロコスモス』という一連の楽曲集であり、この中には非常に短い曲が数多く収められている。旅先で短い曲でもいいから何か曲を作りたい、という強い気持ちが自分の内側にあっ

た。いついかなる場所においても、日記の執筆と作曲をし続ける。それが自分の人生を生きることであり、毎日をより深く生きることにつながるのだという認識を深める。

今回の旅で、ショパン博物館、リスト博物館、バルトーク博物館を訪れることによって、必ず何か音楽的な促しが自分にもたらされるような予感がしている。それを過度に期待してはならないが、それが起こるというのは何となく感じられる。なぜなら、それらの場所に私を向かわせようとする何かがあるからである。旅先において、どのような新たな気づきや促しがあるのかはまだ分からない。それらとの出会いの都度、日記として、曲として、それらを書き留めておきたい。日々綴られる日記と曲は、自分がこの世界に存在していたことを示す唯一の存在記なのだから。フローニンゲン：2018/4/13(金)05:47

No.965: A Gentle Atmosphere in Spring

A peaceful and gentle atmosphere is embracing Groningen. At last, spring has come to Groningen. Groningen, 09:35, Wednesday, 5/2/2018

2413. 【中欧旅行記】遙か彼方の地点に向かって

つい先ほど列車がフローニンゲン中央駅を出発し、スキポール空港に向けて出発をした。自宅を出発した頃には少しずつ外が明るくなっており、駅に到着する頃にはフローニンゲンの街を包む闇が晴れていた。また、早朝の六時にもかかわらず、外の気温は生暖かかった。昨夜未明に雨が降っており、その影響もあって気温が上がっていたのだろう。さらには、こうした朝の気温の高まりは、春の到来を示すものに他ならない。

自宅から駅に向かっていく最中、私はこの早朝の気温の高まりを喜んだ。長い冬が終わり、もう春がやってきたのだとほぼ確信したのである。早朝の気温の高まりだけではなく、道を歩いている最中に、春の花々の香りがどことなく漂ってきていた。その香りを嗅ぐと、どこか昔の記憶が思い出された。幼少の頃の春の思い出の記憶が次々と蘇ってくる。香りには記憶を喚起するような力があるのかもしれない。ここからも、香りが伴う記憶の強さを実感する。私は思わぬ形で春を確かに実感することになった。

早朝のこの時間帯に外に出ることは滅多になく、それこそ旅行に出かける時ぐらいである。今朝、春の到来を確かに噛み締めることができ、幸運だった。

フローニンゲンを出発した列車は順調にスキポール空港に向かっている。車窓から見える景色がとても親しみのあるもののように思える。フローニンゲンに来てから二年ほどの時間が経つ。その期間に、この街は私の新たな故郷になったのだろう。

スキポール空港からフローニンゲンに向かった初めての日のことを思い出す。あまりにのどかな景色が延々と続く光景に最初は驚かされた。広大な畑が広がっており、そこには馬や牛が飼われている。そして、大きな風車が時折顔を覗かせる。そのような光景はそれまでの私にとってはとても見慣れないものだった。だが今は、それらの景色が自分の内側の故郷を構成している。

人は本当に歩いていくものらしい。人は一步一步未知なる世界に足を踏み入れ、少しずつ自己の存在を深め、人生そのものを深めていく生き物らしい。

今窓から見えるこの光景が自分の内側に、一つのかげがえのない故郷として映し出される。この風景に対してそのような心象を持つことを当時の私は予想できただろうか。フローニンゲンの街が自分の大切な故郷の一つになることなど想像できただろうか。人生はそうした予想や想像を超える形で進行していく。そうした進行が、人生の深耕を促していく。そのようなことを思わずにはいられない。

今回の旅が、また自分にとっての新たな出発になる予感がしている。こうした予感すらも超えたことが起こるだろうか。そうであれば、それに自己を委ねたいと思う。フローニンゲンを出発した列車が、着実にスキポール空港に向かっている。その終着駅を超えて、どこか私は遥か彼方の駅のない地点に向かっているかのようなのである。スキポール空港へ向けた列車の中:2018/4/13(金)07:16

No.966:Tender Clouds

I can see some clouds smiling, which makes us smile. Tender clouds exist everywhere. Groningen,
12:08, Thursday, 5/3/2018

2414. 【中欧旅行記】スキポール空港のラウンジから

つい今しがた、スキポール空港に到着した。今朝は四時過ぎに起床し、六時過ぎに自宅を出発してからすでに随分と時間が経っていることに驚かされる。

朝早く起床することは、午前中の間に随分と多くの活動に時間を使うことを可能にしてくれるのだと改めて思う。空港に向かうまでの移動中は、過去の日記を編集することに多くの時間を充てていた。この旅行中に、空き時間を活用しながら過去の日記を編集することに從事したいと思う。

今回の中欧旅行からフローニンゲンに戻ってからは、いよいよ修士論文の最後の詰めを行っていく。自身として三回目の修士論文の執筆であるから、執筆の流れとその作業量に対する理解はすでにある。どれだけの期間をどれだけ集中するかを経験値があることは確かだが、今回の修士論文も充実した内容を持つものにし、去年の論文と同様に、今回の論文を基に査読論文を執筆したいと思う。その際には、ぜひともまたミハエル・ツショル教授と協働する形で査読論文を完成させたいと思う。

集中的に論文を執筆する前の休息として今回の中欧旅行を位置付けたい。もちろん、その他にも様々な意味付けが可能だが、論文の執筆に取り掛かるエネルギーを充電することの意味が今回の旅行に多分に含まれていることを疑うことはできない。

昨日に、フローニンゲン大学で履修する全てのコースの最終試験が終わり、その区切りとしての意義が今回の旅行にはある。ワルシャワ行きの飛行機をラウンジで待ちながら、そのようなことをふと思う。

幸か不幸か、ワルシャワ行きの飛行機が20分ほど遅れている。航空券を購入する時に、「通常30分ぐらい遅れる」という表示があり、遅延表明を先立って行っていることにある種の潔さと誠実さを感じた。

今日も私は、スキポール空港でいつものラウンジを利用している。「プライオリティー・パス」というのは非常に便利なカードであり、これがあれば世界中の多くのラウンジを無料で利用することができる。去年の年末に日本に帰る際には、このカードを使わず、搭乗券を用いてオランダ航空のラウンジを

利用したが、今回は利用する航空会社も異なり、ヨーロッパ国内の移動であるから搭乗ステータスも高いものにせず、プライオリティー・パスを利用して空港のラウンジを利用することにした。

時刻は十時を目前にしており、ラウンジ内は飛行機を待つ人で随分と埋まっている。これからここに
いる人たちはそれぞれの目的地に向かって飛び立っていくのだろう。

ワルシャワ行きの飛行機の搭乗時間も迫ってきている。飛行機の遅延のおかげで、今このようにして
ワルシャワ到着前の最後の日記を綴ることができる。

ワルシャワとはどのような街なのだろうかという期待が徐々に高まる。ワルシャワ・ショパン空港に到
着したら、すぐにワルシャワの街に向かい、ホテルのチェックインを済ませたいと思う。ワルシャワの
街に到着する頃にはチェックインの時間となり、ちょうど良いタイミングになるのではないかと思う。
今日はどこか特定の場所に観光に行くことはせず、ワルシャワの街を散策する程度に留めたい。明
日から本格的に、自分が足を運びたいと思っていた場所を一つずつ訪れる。

そろそろ搭乗ゲートに向かおうと思う。ワルシャワ訪問への期待を胸に仕舞い、一旦日記を綴るの
をここで終えようと思う。スキポール空港:2018/4/13(金)10:05

No.967: A Yellow Rain

There were a couple of sporadic rainy days until yesterday. It is mysterious to me that I perceived
the rain to be tranquil yellow. Groningen, 12:21, Thursday, 5/3/2018

2415. 【中欧旅行記】ワルシャワ到着

フライトが40分ほど遅れたが、先ほどワルシャワに無事に着いた。ワルシャワ・ショパン空港に到着
すると、早速空港から街の中心街まで電車で移動した。乗車した列車はとても綺麗であり、それで
いて乗客は多くない。電車に乗ったのは昼過ぎの時間帯であるからもう少し人がいてもいいと思っ
たのであるが、ワルシャワは人口密度があまり高くないのであろうか、というような安直な仮説が脳裏
をよぎる。

今回の宿泊先は、ワルシャワ中央駅からほど近くにあるホテルだ。人生において旅に出かけることのできる回数に限りがあることを最近考えるようになり、とにかく宿泊先ではゆっくりと落ち着けることを最優先にした結果、今回のホテルを選んだ。

空港からワルシャワ中央駅まで電車で移動している最中、ポーランド語がとても独特な言語であることに気づいた。途中の駅の名前がポーランド語でアナウンスされた時、「その発音は自分には絶対に不可能だ・・・」というような駅名がいくつもあり、アナウンスを聞いていると思わず笑みがこぼれてきた。途中駅のアナウンスがあるたびに私は耳をそばだて、その難解なポーランド語の駅名を聞きながら笑っていた。列車の窓から見える景色の中で、線路の脇に咲いている花々がとても印象に残っている。

「あっ、桜だ」と私は思わず口ずさんだ。いかんせん植物に明るくないため、それが桜かどうか定かではないのだが、桜のような木がいくつか見えた時、私はとても嬉しくなった。その嬉しさは、日本の桜を懐かしく思う気持ちと日本の春そのものを懐かしく思う気持ちを引き起こした。

フローニンゲン以上にワルシャワは暖かく、それは空港に到着した瞬間に気づいた。ジャケットを羽織る必要はないぐらいの暖かさだ。そうした暖かい気候が、どこか日本の春を私に思い出させたのである。「日本の春の陽気はこのような感じだったなあ」と思わず口ずさみそうになる。まさかワルシャワに来て日本の春を思い出すことになるとは思ってもみなかった。

無事にワルシャワ中央駅に到着すると、私は早速ホテルに向かった。駅からすぐ近くにある宿泊先のホテルに向かおうとして駅から出ると、もうそのホテルが高くそびえ立っているのが見えて一安心した。地図を開いてホテルを探す必要もなく、そのことが私を安心させたのである。ホテルの入り口に到着して一歩中に入ると、選んで正解であったという落ち着いた雰囲気がそこに広がっていた。

チェックインをすぐに済ませ、自分の部屋に到着すると、そのサービスは申し分ないように思えた。今朝は四時過ぎに起床したこともあり、少しばかり仮眠を取った。

今日はこれから、ホテルから近所にある公園に足を運び、公園内を少しばかり散歩したい。なにやらショパンの大きな銅像が建っているらしい。

仮眠をとったおかげで活動エネルギーが戻ってきた。ワルシャワまで来てなぜだか分からないが、急に日本食が食べたくなり、これからまずは早めの夕食を食べ、その足で目的の公園をゆっくり歩こうと思う。ワルシャワ:2018/4/13(金) 16:51

No.968: A Cold Wind

A cold wind was blowing in Groningen a couple of days ago. Yet, the weather is fine today with no wind. It reflects my inner world. Groningen, 09:06, Friday, 5/4/2018

2416. 【中欧旅行記】ワルシャワの日本食レストランから

ワルシャワに到着した初日が今終わりに差し掛かっている。ワルシャワ・ショパン空港からワルシャワ中央駅に向かう列車の中から見た景色によって日本の春を思い出し、それが影響をしてなのか、ホテルに到着するや否や今日の夕食は日本食を久しぶりに食べたいと思った。

先ほど、自室に備え付けのネスプレッソマシーンでコーヒーを入れ、それを飲みながら一息ついていた。仮眠を含め、しばらくホテルで休息を取った後に、夕方の五時ぐらいから日本食が食べられる近くの定食屋に向かった。

そこはレストランというほどの大きさではなく、どこかカフェのようでもあり、家族テーブルが三つあるだけのとても小さな定食屋だった。事前にホテルでその店について調べていたところ、なにやら落ち着いた感じが漂っており、同時にとてもローカルな感じがして好意的に思っていた。

ホテルから数分ほど歩いた場所にその定食屋があり、そこに到着してみると、すでにポーランド人のカップルの二人が夕食を摂っている最中だった。私は空いている残り二つのうちの一つのテーブルに案内され、カツ丼と餃子を頼んだ。丼物と餃子を食べるのはどれくらいぶりだろうか。去年の年末に実家に戻った際に、カツ丼ではないが、海鮮丼を食べたことを覚えており、丼物を食べるのはそれ以来のことだろうか。何より白米を口にすることが数ヶ月ぶりのように思う。

注文を受けてくれたのはポーランド人の若い女性であり、料理を作ってくれたのは日本人の男性だった。どうやら二人でこの店を切り盛りしているようだ。

夕食に合わせて、私は日本茶を頼んだ。注文がやってくるまで、私は持参した“A Philosophy of Music Education (1970)”を読んでいた。ちょうどワルシャワに向かう飛行機の機内でこの書籍を読んでおり、音楽教育に関する哲学思想と音楽に関する美学思想について随分と得るものも多く、一回の読書では消化しきれないことが多々あった。

この定食屋で注文を待っている間も、本書を食い入るようにして読んでいた。しばらくすると先に日本茶が運ばれてきた。なんと嬉しいことに、急須に入ったお茶だった。急須という物体を見たのはどれくらいぶりだろうか。そして、急須という物体を間近で眺めた時にもたらされるこの安堵感はいったいなんだろうか。

私は大きな安堵感と共に、急須から湯飲み茶わんにお茶を注いだ。とても香ばしい香りが漂い、一口飲んだ時には何か心の底から安堵感を感じた。まさかワルシャワの街でこのような感覚を得ると思ってもいなかった。お茶を一口飲み、またしばらく持参した書籍に目を通していった。

すると程なくして、餃子とカツ丼が運ばれてきた。これら二つの味も格別だった。日本で食べていた餃子とカツ丼と同じ味がする、というだけ感激も一塩だった。

私は全てを綺麗に平らげ、ゆっくりとお茶を飲み、それを飲み終えて一休憩してから、店を切り盛りしている二人にお礼を述べて店を後にした。ワルシャワに滞在している期間の夕食は全てここで食べてもいいのではないかと思うぐらいに美味しかった。明日もぜひ足を運ぼうと思う。ワルシャワ：

2018/4/13(金)21:08

No.969:Bounce of Souls

Spring enables me to feel that each life is vibrating softly and powerfully. Every life has its intrinsic bounce. Groningen, 09:22, Friday, 5/4/2018

2417. 【中欧旅行記】侘しさと哀しさを引き起こすワルシャワ:ワルシャワ滞在初日の印象

夕食に美味しい日本食を食べ、私は腹ごなしを兼ねてワルシャワの街が誇る大きな公園に足を運んだ。実はまだ書き留めていなかったが、私はワルシャワの街に到着した時に、西欧とは異なる雰囲気があることに漂っていることを即座に察知した。それは端的には、「どこことなく侘しい感覚」と表現す

ることができるかもしれない。侘しさ、もしくはどこことなく寂しい感情が静かに私の内側に流れてきた。

この感覚の正体は一体何なのだろうか。ポーランドの首都であるワルシャワの街に降り立った時、この街が旧東欧諸国の名残を未だに残していることが一目瞭然だった。まだ先進国とは言えない雰囲気がある。これは否定的な意味ではなく、事実として昔ながらの政治経済の体制が依然としてこの国に残っていることを静かに物語っていた。

街中にたたずんでいる建物も「歴史がある」と言えば聞こえがいいが、それは西欧諸国の歴史ある建物とはまたどこか違うオーラを放っている。「建物に哀しみの感情が染み付いている。そんな様子を持っているのがワルシャワの建物である」というのが私の第一印象だった。

そうした印象を絶えず持ちながら、私は目的の公園に向かって歩き続けていた。しばらくすると、市民の憩いの場である公園が目に見え始めた。二つの大通りが交差する場所にその公園があり、その空間だけ別種の結界を張っているかのように映った。

公園の中に入ってみると、先ほどの哀しみの感情とは打って変わり、平和な空気がそこに流れていた。公園内には数多くのベンチがあり、たいていのベンチには誰かが腰掛けており、何をすることもなくぼんやりと休憩している人や、連れと対話をしている人、ノートを片手に黙々と何かを書いている学生のような姿を見かけた。それぞれが思い思いにこの公園でゆったりとした時間を過ごしているという印象を受けた。公園内を歩くにつれて、どこか見覚えのある木々、いや忘れようにも忘れるはずのない木々が目に飛び込んできた。

それは満開の桜の木々であった。「空港から駅に向かう最中に見たのはやっぱり桜の木だったんだ」と私は心の中で叫んだ。私は急ぐ気持ちを抑えながら、桜の木の下に向かっていった。あたかも桜の木に話しかけるように、「とても綺麗な桜だ」と私は心の中でつぶやいていた。

桜の木の下に歩み寄り、満開の桜を見上げた。ワルシャワの青空と満開の桜の花々が見事な調和を成していた。

ワルシャワの気候のおかげもあり、日本よりも随分と遅い時期に桜が満開になったようだった。私は久しぶりに満開の桜を眺め、桜の香りを味わうことができた。

結局、この公園にあるはずのショパンの銅像を見つけることができなかったが、この満開の桜を見ることができただけで十分だった。私はしばらくこの公園でゆっくりし、また来た道に戻りホテルに帰った。

心休まる公園の周りには、再び侘しい感情を引き起こす空間が広がっていた。そんな印象を与えたのがワルシャワ滞在の一日目であった。ワルシャワ:2018/4/13(金)21:44

No.970: Tranquility

The essence of this reality encloses something that makes us tranquil. “Tranquility” would be one of the essential aspects of the depth of this reality. Groningen, 08:09, Saturday, 5/5/2018

2418. 【中欧旅行記】ワルシャワ滞在の二日目の朝に

ワルシャワ滞在の二日目が静かに幕を開けた。昨日はフローニンゲンからワルシャワに向かうため、早朝の四時に起床した。今朝は普段と同じリズムに戻し、五時半に起床した。とはいえ、昨夜は旅の興奮からか熟睡することはできず、絶えず頭が冴えているような状態であった。決して宿泊先のホテルに問題があるわけではなく、むしろ逆にホテルは清潔かつとても静かだ。

宿泊しているホテルは立地が良く、自室からはワルシャワの街を一望できる。昨夜気付いたのは、近くに大型のサッカースタジアムか何かがあることだった。そのスタジアムには工夫が施されており、巨大なスタジアムの周囲の壁に大きな文字が光り輝きながら浮かび上がるようになっていた。それらの文字はポーランド語であったから何と書かれていたのかわからないが、非常に目立つ建築物だと思った。

早朝の六時前を迎えるワルシャワの街はとても静かだ。今、朝日が遠くの空の雲間から顔を出し、これからワルシャワ全体の街を照らし出そうとしている。朝日の見える方角は少しばかり霧がかかっているようであり、スタジアム全体がすっぽりと霧に覆われている。広がる青空と輝きを増す朝日を見

ていると、「この世界にこうしてある」ということだけで有り難さを感じる。ワルシャワでの二日目が今静かに始まろうとしている。

昨日、私はワルシャワの第一印象をどことなく侘しく、そして哀しみが混じった街だと表現していた。その理由が少しずつ明らかになってきた。こうした感覚を引き起こす背景には、その街に堆積された歴史が常に鍵を握っている。少しばかりワルシャワの歴史を調べてみると、この街の辛い歴史が明らかになってきたのである。

直近の歴史で言えば、第二次世界大戦の惨禍を忘れることはできない。第二次世界大戦の際に、ワルシャワは大きな被害を受け、街の八割以上が破壊されてしまったそうだ。戦争からもう70年ほどが経とうというのに、どこか当時に受けた傷跡が今も残っているように思える。これはもちろん、街全体の建物の様子から分かることでもあり、同時にこの街を取り巻く集合意識にどこかまだ治癒されていない傷のようなものがあるように思える。

自室からワルシャワ全体を眺めてみると、古びた建物はあるのだが、それでいて歴史的建造物と思えるようなものはそれほど見当たらない。おそらく、それらは戦争によって破壊されてしまったのだろう。また、この国の経済もそれほど発展しているとは思えない。

アムステルダムからワルシャワへ移動する際に、私はポーランド航空を活用した。機内の中で私は、何気なく備え付けの雑誌に目を通した。そこではポーランドを含め、いくつかの国々の経済成長に関する特集が組まれていた。

確かにポーランドは近年少しずつ経済成長を遂げてきているようだが、経済のレベルは西欧諸国などと比べるとやはり低いと言わざるをえない。経済の発展もまだまだであるためか、ワルシャワの街にも現代的な建物は思っていた以上に少ない。実際に、今私が宿泊しているホテルと同じぐらいの高さの建物はほとんど見当たらない。スタジアムの方角に何か一つ大きな建物があるぐらいだ。

ワルシャワの歴史と文化に関する理解を深める必要がある、と改めて思う。この街の歴史や文化をより深く理解すれば、この街が発している何とも言えない寂しさの感覚の正体が少しずつ明らかになっていくだろう。

明日にワルシャワ国立美術館を訪れることによって、ワルシャワの芸術文化を今より少しでも理解し、明後日にポーランド・ユダヤ人歴史博物館を訪れることによって、あの悲惨な戦争の歴史とそれがワルシャワに与えた事柄について理解を得たいと思う。

ワルシャワで過ごす二日目が静かに始まりを告げている。ワルシャワ:2018/4/14(土)06:17

No.971: Serenity

Today is Saturday. Serenity is permeating in the city of Groningen. I can almost see stairs to enlightenment inside of the placidity. Groningen, 08:26, Saturday, 5/5/2018

2419. 【中欧旅行記】ワルシャワの物価と言語事情

朝日が輝きを増し、ワルシャワの街を優しく照らし始めている。相変わらず街全体に少しばかり霧がかかっているが、それもじきに晴れるようだ。ワルシャワに到着してすぐに気づいたが、フローニンゲンよりも随分と気温が暖かい。実際に昨日はジャケットを羽織る必要などなく、長袖だけで生活ができるような暖かさであった。

天気予報を見ると、今日も天気恵まれており、ワルシャワ滞在中はジャケットが不要のようだ。昨夜は少しばかり雨がパラパラと降っていたが、今はすでに止んでおり、今日は一日中快晴となる。今回の旅行も天気恵まれることが多そうであり、とても有り難く思う。

今はまだ早朝の六時半であるから、これから朝食までの時間を用いて、過去の日記を編集したいと思う。まだまだ未編集の記事が大量に残っているが、この旅行期間を使って少しずつ着実に編集作業を進めていく。隙間時間を活用しながら少しずつ編集を進めていけば、いつか大きな編集成果となるだろう。そのようなことに思いを馳せながら、日々無理のない範囲で小さく編集を進めていきたい。

旅先でいつも楽しみなのはホテルの朝食である。フローニンゲンで生活をしている時の普通の朝食は、果物とヨーグルトぐらいしか摂らないようにしている。それだけで午前中の活動には十分であると言えるし、朝食を食べることによって消化にエネルギーを使いたくないという考えがある。果物による少量の朝食によって、消化にエネルギーを使うのではなく、午前中は脳にエネルギーが充満した

状態で仕事に取り掛かることができているように思う。人は以外と消化に多くのエネルギーを活用するようであり、大量の食べ物を摂取した際に脳がぼんやりしたり眠くなったりするのはそのためだろう。

そうしたことを避けるために、朝食はいつも控えめにしているというのがここ数年間の食生活だ。一方で、私は旅先においては大量の朝食を摂る。というのも、普段とは異なり、旅先では午前中から観光によって体を動かすからである。大抵宿泊先のホテルでは遅めの朝食を摂る。その際には必ずビュッフェ形式の朝食を摂るようにし、昼食を摂る必要はないほどにしっかりと朝食を食べる。

時刻は六時半を迎えたが、今日の朝食はまだまだ先だ。今日はショパン博物館だけを訪れる予定であり、開館が11時であるから、今日の朝食はよりゆったりとしたものになるだろう。予定では九時半あたりにレストランのある階に降りていき、そこでゆっくりと朝食を摂るつもりだ。この時間帯から一時間ほどの時間をかけて朝食をしっかり摂れば、昼食を摂る必要はないだろう。今日の夜はまた、あの日本食レストランに足を運びたい。

ワルシャワの街に到着して気付いたのは、この街が発する物寂しい雰囲気だけではなく、物価の安さだ。昨日は昼食を食べていなかったこともあり、日本食レストランでの夕食は比較的多く食べたが、それでもフローニンゲンに比べれば随分と安かった。また、その後訪れたローカルのスーパーで1.5リットルの水を購入した時、40円ほどでそれを購入することができた。どうやらこの国の物価は安いようである。

一方、ワルシャワでは英語が通じる場所とあまり通じない場所があるように思った。フローニンゲンではこのようなことはなく、どんなローカルの店でも英語が通じる。昨日足を運んだスーパーでは若い店員がレジを担当していたが、あまり英語が話せないようであった。経済と言語に関しては、ワルシャワはまだ発展途上なのだろう。そのようなことを初日に考えていたことを思い出す。ワルシャワ：
2018/4/14(土)07:00

2420. 【中欧旅行記】ワルシャワ滞在の二日目の活動に向けて

ワルシャワでの滞在二日目の朝がゆっくりと進行していく。時刻は八時を回ったが、まだ朝食を摂っていない。これからシャワーを浴び、外出できる準備を整えてから朝食をゆっくりと摂りたいと思う。

春のワルシャワの気候は大変心地良く、どこか気分を明るくしてくれる。しかし、そこには昨日の日記で書き留めたように、幾分哀しみが含まれている。

今日はこれから歩いて15分ほどの場所にあるショパン博物館に行く。ショパンは母国ポーランドを離れ、それ以降パリで長く人生を過ごした。そのような人生を送ったショパンは、絶えず母国への愛を保持し続けており、ポーランドの文化に根ざした曲を作り続けていたことを思い出す。ショパンの曲の中にどこか哀しみを覚えることがあり、その哀しみはもしかすると、ワルシャワに今も流れ続けている感覚と同じものだと言えるかもしれない。

また、ショパン自身が自らの故郷であるワルシャワを含め、ポーランドに対してこうした哀しみの感情を抱いていたのかもしれないと思う。ショパンが何を想いながら作曲を続けていったのかを含め、今日これから訪れる博物館でショパンの生き方の一端を掴めればと思う。

早朝に立ち込めていた霧も随分と晴れ、爽やかな春の世界が広がっている。今日はどうやらジャケットは必要なさそうである。新たな季節の息吹をワルシャワの街でも感じる事ができて嬉しく思う。

そういえば、この国のチップの習慣についてまだきちんと理解していない自分がいることに気づいた。ホテルの清掃やレストランでのチップはどうなっているのだろうか。そのあたりについてはインターネット上に情報が記載されているが、朝食を摂る際にレセプションに立ち寄り、そこで確認したいと思う。チップの支払いに必要な小銭を持っておらず、そもそも現地通貨のズウォティを持っていないため、必要であればユーロからズウォティに両替をしておく必要がありそうだ。

そろそろシャワーを浴びて、外出の準備をし始めようと思う。九時半前にホテルのレストランに向かい、そこで朝食を摂る。その後少しばかり自室で休憩をした後に、11時の開館に合わせてショパン博物館に向かう。

今日はどのような一日になるだろうか。今日という新たな日の始まりに少しずつ期待が高まっていく。
ワルシャワ:2018/4/14(土)08:44